



TITLE:

各地よりのたより

AUTHOR(S):

CITATION:

各地よりのたより. 天界 1940, 20(233): 350-352

ISSUE DATE:

1940-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168055>

RIGHT:

各地よりのたより

臺北支部だより

去る七月十八日夜、臺北支部では、七月の例會を兼ね、ゆうかり社の後援で、銷夏に適はしい試みである“星を觀る句會”を臺北市公會堂四階屋で開催した。出席者40餘名が、透徹たる夏星の下、大臺北の夜景を俯瞰し乍ら、ものした澤山の句の中から10句だけ御披露する。

| | |
|-----------------|-----|
| 指させる北斗の杓の見えて涼し | 孕 江 |
| 椰子の葉のきらめく雨後の星涼し | 南 枝 |
| 大江の流れは遠し天の川 | 星 河 |
| 星の名を覚えて夜々の涼にあり | 四折杖 |
| 天ツ星われに近しや夜の秋 | 敦 朗 |
| 夏星に童話の星の國を憶ふ | 電 華 |
| 雨雲の遅々としりぞき星涼し | 壽 美 |
| 夏の星石壁低き街衢なる | 岳 水 |
| 天の川兄は南支にありといふ | 晋 |
| 北十字涼しくかゝり雨後の空 | 貞 水 |

(M. Y.)

滿洲のはしっこから

滿洲志龍須生

早や滿洲に来てから5年になる。渡滿と同時に先輩諸氏努力のあとを引繼いで、大連支部を再建、後、奉天支部を合併、滿洲支部を創建して今に至つてゐるが、果して先輩諸氏の期待に添つてゐるや否や、我々自信の持てない次第である。

滿洲には本協會員は少しであるが、支部會員は100名に上つてゐるが、これは姓名を登録したものだけであつて、果して、全員が全員、星の趣味を持ち、天文を研究し楽しんでゐるかは疑問である。其の他に他會員が十數名居る。これが滿洲の天文界の状況である。

これから録すことは、滿洲の一角から、日滿の天文普及の夢物語である。

1. 滿洲の天文普及

私が居る土地は誠に便利な土地である。それは日本の諸兄の活動状況を客觀的に眺め得られ、そして又滿洲（天文普及状況について未開な）の各地を一眼で眺め得られ、土地の天候は、内地諸兄に見せたい位良好である、誠に恵まれた土地である。そのかはり、不便な點もある。内地諸兄の如く天文を楽しむ寮

團氣の中に居らないので、自然、やれ自分の仕事が忙しいから、やれ今月は一寸つかれたからと云つて、サボることが多い。一人ぼつちの趣味も誠にづらいものである。私の天文普及をやり出したのは、こんな関係からである。即ち内地同様の天文愛好者の一種の雰圍氣を造りたい慾望から起つたのである。大連支部再建第一回例會は昭和11年11月に開催され、10名餘の人々が集つたが、その雰圍氣には我乍ら驚いた。それは無理も無いのであるが、中に天文の天も知らぬ人達がゐた（勿論例外もあつたが）。それには私も弱つた。これではいかぬ、よし徹底的に天文普及をやつてやれ、内地の支部例會のやうになるのには、あと10年は掛るが、それ迄は、あたかも支那に來てゐるあの宣教師のやうな氣持で、10年間がんばらうと思つて、すつかり方針を變へて仕舞つた。自分の研究もさること乍ら、普及を第一に考へねばならぬ。それから、新聞雜誌放送等に普及に乗り出した。それ以外に小學校を中心に、中學校や個人の家庭等に迄入り込んで、やつてゐる。

而し、これだけで足りたであらうか、滿洲國は五族協和の國だ、その指導的な立場にある吾人日本人として、果してこれで好いであらうか。我々は他の民族を指導せねばならない、尊い使命がある。他民族の大多數を占める滿人諸君の生活の中心をなすものは實に天文である。現に康德曆（日本の本曆に當る）を見ても分るのであるが、滿人諸君への指導原理は實に天文に存するのである。こうなつて來ると、天文アマチュアと云へども、じつとはしておられぬ。滿人への天文普及こそ、又、天文研究機關の設置こそ、在滿天文アマチュアの使命であるまいか。

其處迄考へついたのは好かつたが、さて實際問題として、何處から手をつけて好いのか分らない。残念乍ら根本方策について私はほんとうに分らない。今後會員諸兄の智恵を借りなければならぬと思つてゐる。

2. 天文臺の建設

天文臺と云つても、勿論、普及天文臺であるが、兎に角滿洲に天文臺と名の付くものは一つとして存在しない。前にも書いた如く、この國には天文研究機關としての中央天文臺が必要なのではあるまいか。その上に、又、日本の天文臺が天候不良になやまされてゐるのに、滿洲の好天候を、この儘放置して好いのかと考へるとき、誠に残念なことである。

それで滿洲に在住する會員有志間に天文臺建設問題が盛り上つて來たのである。今、旅順近郊の玉ノ浦に計畫しつつあるが、これとて、ちつとやそつとで出來そうにも無い。云はく、資金問題、資材問題等、難關が前途に横たはつてゐる。それ以外に新京、撫順にも普及天文臺を建設したい慾望を持つてゐる。吾々の小さい仕事が、やがて滿洲國中央天文臺の基礎石になるのである。又、

これこそ日本文化の大陸進展の一つの大きなものではあるまいか。吾々アマチュア仲間の東亞協同體へ、興亞への一つの御奉公として、この問題を御考へ願ひたいと思ふ。(2600—8—20)

編輯局より

本號には E. C. スライフ博士の火星面の研究の全譯を載せることが出来たのは本懐である。之れは米國から贈られた Los Angeles Examiner といふ新聞の特ダネ記事であつて、其の要點は、去る七月10日頃の本會急報や、同盟通信により、又、おくて、科學畫報の九月號によつて我が國の一般社會に知らされた通りである。尙ほ、又、七月12日の本會神戸支部例会席上で山本會長が其の原文を紹介された。こゝに載せたものは、原文の全譯で、米國式のジャーナリズムの香りが多分にある。(急報にも知らせた如く、このスライフ氏の發表した火星寫眞の増刷りを、別に希望者には頒ちますから、希望者は本會事務局まで申込んで下さい。郵送料とも、實費1圓也です。)

木邊成麿氏の白鳥座 SS 型の變星論は、前號からの續きで、尙ほ一二回連續するが、此の種の星の觀測や研究は、氏の最も得意とされる所で、學術的に、最も讀みごたへのあるものである。

S. I. 氏の古代日本曆の研究も、木邊氏のに劣らぬ深い研究の發表で、既に7回を重ねてゐるが、今後尙ほ數回續載される豫定である。我が國の古代文化研究の資料として、貴重なものであると共に、讀者の研究心に多くの示唆を與へるものと言つて宜からう。

大阪商科大學長河田法學博士の文は、他からの轉載で、人々の立場々々による多方面からの言ひ分はあらうが、之れについては主筆の寸評が卷頭に載つてゐるから、こゝに多くを語らない。

タテ組附録の“コロンブスの天文學”は、今から四五百年前の、“コペルニク以前”の歐洲天文學界の一面を伺ひ得られる名文である。資料はドイツのチンナ博士の研究論文に獲たもので、貴重な一文献である。之れも數ヶ月前の神戸の例会で主筆が朗讀紹介されたものである。

觀測部月報報告へ筆を向けるが、此の頃、最も健實なのは、只、流星課だけで、他は太陽でも、黃道光でも、觀測報告が振はない。之れには、人的關係だけでなしに、天空異變の影響も多分にあるが、それにしても、五六年前の盛況に比べて、太陽黑點觀測報告に缺測の多いことは惱みのたねである。部長や課長の指導宜しきを得て、何とか現状から立ち上つて貰ひたい。太陽黑點の活動は確かに極大期を過ぎたけれど、しかし、黑點の學的價值は、(第323頁へ)